

ハイデルベルク信仰問答講解説教 25 「神の深みへ」(2012年2月19日 礼拝説教)

【聖書箇所】

あなたの神、主はあなたとあなたの子孫の心に割礼を施し、心を尽くし、魂を尽くして、あなたの神、主を愛して命を得ることができるようになってください。(申命記 30 : 6)

わたしたちには、神が「霊」によってそのことを明らかに示してくださいました。「霊」は一切のことを、神の深みさえも究めます。人の内にある霊以外に、いったいだれが、人のことを知るでしょうか。同じように、神の霊以外に神のことを知る者はいません。わたしたちは、世の霊ではなく、神からの霊を受けました。それでわたしたちは、神から恵みとして与えられたものを知るようになったのです。そして、わたしたちがこれについて語るのも、人の知恵に教えられた言葉によるのではなく、「霊」に教えられた言葉によっています。つまり、霊的なものによって霊的なことを説明するのです。自然の人は神の霊に属する事柄を受け入れません。その人にとって、それは愚かなことであり、理解できないのです。霊によって初めて判断できるからです。(I コリント 2 : 10-14)

【説教】

今日は、第25主日、問65-68までを読みます。ここから聖礼典についての問答が始まります。この第二部では、使徒信条についての問答があり、そして前回、前々回と宗教改革の重要な主題であった「信仰義認」のことが扱われました。わたしたちの行いではなく、キリストの十字架と復活による罪の赦しと新しい命を信じる信仰によって救われるということです。

さて、この第二部は「人間の救いについて」という部分なのですが、信仰問答は、ここに聖礼典についての問答を置きます。それはこのキリストの救いを信じる信仰が聖礼典とも深いつながりがあるからです。聖礼典を扱わないで人間の救いを論じることはできないのです。ちなみにこの聖礼典については、今日の問答の最後問68にあります。わたしたちプロテスタントの教会では洗礼と聖餐のことを指しています。聖晩餐、これは主の晩餐、主の食卓とも言われますが、所謂わたしたちの言う聖餐のことです。ちなみにローマカトリック教会では聖礼典については二つではなく、七つを数えます。「七つの秘跡」と呼ばれますが、そこには結婚や葬儀も含まれます。しかしプロテスタント教会ではこの洗礼、聖餐の二つを聖礼典として重んじています。それは主イエスが福音書において直接、お命じになられたことだからです。洗礼については、マタイによる福音書の最後のところ、弟子の派遣のところで、「父と子と聖霊の名によってバプテスマを授け」とあります。また聖餐については、共観福音書の最後の晩餐のところで「わたしの記念としてこれを行いなさい」と言われます。それぞれのことについてはこの後の問答で改めて扱うことになります。今日は総じてこの聖礼典の持つ意味を考えてみましょう。

問65を読みます。プロテスタント教会は「信仰によってのみ救われる」ということを強調しました。信仰が肝心であることを繰り返し申します。ではその信仰がどこから来るのか。これは当然興味のあることではないでしょうか。どうしたら信仰を持つことが出来るのか。信仰を求めて教会に来た人は誰でもそう思うでしょう。それは仏教で言う「悟り」のようなものでしょうか。修行して、やがてそのような境地に至るのでしょうか。

しかし「信仰はどこから来るのですか」この問いがすでに一つの答えを含んでいます。つまり信仰は外からやってくる。自分の中に起こるもの、自然にわいてくるものではない。外から自分の中に入ってくるもの。そういう意味で信仰は与えられるものであり賜物です。ですから信仰を自分の功績のように考えてはいけません。自分の功績と捉えれば、そこには優劣がつけられるでしょう。人との比較も起こります。あの人は信仰深い、自分はまだまだだ。そういう考えが起こるのです。信仰はそのような考えをすでに乗り越えています。

では信仰はどこから来るのか。「聖霊が」まずここに重要な点

があります。この信仰をお与えになるのは聖霊、神さま御自身であります。つまり人間の救いは、どこまでも神さまが主導権を握っておられるのです。イエス・キリストを与えて救いの手だてを備え、かつまたそこにわたしたちを導き、そのすべての恵みに与らせてくださるのも神さまなのです。今日読んだ御言葉に「霊は、一切のことを、神の深みさえも極めます」(I コリント 2 : 10)とあります。聖霊がすべて神さまのこと、信仰のこと、救いのことを分らせてくださる。人間がそれに到達することはできないのです。

それはある意味当然のことではないでしょうか。つまり神さまがこの世界、天地万物、人間をお造りになられたのです。その創造者であるお方が、この世界、この人間のことに最後まで責任を負ってください。造ったら造りっぱなしではない。あとは皆さんでよろしくということではない。罪に墮ちてしまったこの世界をもう一度、お造りになられた時のように祝福される。この人間の回復もすべて神さまがなさるのです。そのために神さま自ら働かれるのです。イザヤ書に「わたしはあなたたちを造った。わたしが担い、背負い、救い出す」(イザヤ 46 : 4)とあります。その約束の通り、神さまは、お造りになられたわたしたちをどこまでも担われます。

さて、信仰問答は、その信仰が聖霊によって具体的にどのようにわたしたちの内におこされるのかを明らかにしています。それは「聖なる福音の説教を通してそれを起こし、聖礼典の執行を通してそれを確かにつけてくださる」というのです。説教と聖礼典がここで取り上げられます。説教というのは、日曜日の礼拝で牧師が語る説教のこと。それを聞くことによって信仰が起こされる。ローマの信徒への手紙に「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです」(10 : 17)とあります。キリストの言葉というのは、キリストによってなされた救いの御業、十字架と復活の出来事と理解してよいでしょう。それによってわたしたちが罪を赦され、神さまの御前に回復されるという救いの出来事です。何より説教においてはそこが語られなくてはなりません。

礼拝における牧師の説教は、牧師が自分の関心事を勝手に話していることではありません。また世の中のこと、社会のことを話す場所でもありません。時々「先生は大変ですね。毎週、違うお話をしなければなりませんから」と言われることがあります。確かに聖書の箇所、取り上げる話は違うでしょうけれども、しかし聖書のどこで説教をしても、基本的に語る内容は一つです。「聖なる福音の説教」とありますように、それが聖書の示す福音、神さまの救いの出来事であればならないのです。どの聖書の御言葉でもキリストの出来事を指し示している。ある人は金太郎あめのように聖書のどこを切ってもキリストが出てこなければならないと言いました。このキリストの言葉を牧

師が語り、これを聞くことによって、聖霊が働いて、わたしたちの内に信仰が起こされるのです。

しかし、信仰問答はそれで終わりにはしない。ただ説教を聞くだけではない。そこに聖礼典が行われることによって、聖霊がその信仰を確かにしてくださると言います。「確かに」というのは堅くするということです。聞いただけでは、まだ流動的なのです。しっかり定まっていな。しかし聖礼典、洗礼と聖餐によって、それがしっかりとわたしの中に定まる。心に堅く留まるのです。

そこでもう少しこの聖礼典の意味を深めるために問66に聞きましょう。「神によって制定された、目に見える聖なるしるしまた封印」とあります。この聖礼典という言葉は、皆さんもお聞きになったことがあると思いますが、 sacrament と言います。これはラテン語ですが、これは元々、ローマ皇帝に忠誠を誓うために兵士が今でいうネックレスのようなものを身につけたのです。つまり見えぬ忠誠を、目に見えるしるし、形であらわしたものを sacrament と呼んだのです。これが教会の中では、聖礼典として、信仰を目に見える形であらわすしるしとして理解されました。

信仰はもちろん目に見えません。見えればあるかないかがすぐ分かりますし、その大きさも分かるでしょう。でも見えない。そこに信仰の難しさがあります。自分でも自分に信仰があるのか、分からなくなることがある。いろいろな試練にある時、礼拝から遠ざかってしまう時、信仰が分からなくなることがある。キリストの救いから自分はもれているのではないか。もう神さまはわたしを見捨てられているのではないか。でもだからこそ、この目に見えるしるしがあることが感謝なのです。

この『ハイデルベルク信仰問答』より20年程前にカルヴァンが出した『ジュネーヴ教会信仰問答』があります。そこにやはり聖礼典の問答がありまして、なぜ神さまがこのような聖礼典をお使いになるのかと問うところがあります。その答えは「われわれの弱さを緩和するためです」と答えます。またそのような手段を用いられるのは、それはわたしたちの不信のしるしではないかと問うのに対して、「それは信仰が小さく弱いしるしであります。このようなことは神の子らによくあることで、彼らはそれでも信徒であることには変わりないのであります。われわれがこの世に生活している間は、常に不信の異物がわれわれの肉の中にあるからであります」

カルヴァンは、聖礼典のことを取り上げの中で、徹底してわたしたちの弱さを考えます。わたしたちはこの弱さに立つことが必要ではないでしょうか。もちろん見ないでも信じることができれば幸いです。それは主イエスもトマスに言われました。「見ないのに信じる人は幸いです」と。しかし、わたしたちは弱いのです。いつも熱心でいられるわけではない。時に救いを疑い、見失い、また自分が邪魔をして御言葉が聞けない。神さまを中心に生きることができなくなる。それを主イエスはよくご存知なのです。だからこそ教会を与えられたのではないのでしょうか。一人ではなく、信じる群れ、共同体を与えてくださった。そして絶えず御言葉が聞けるようにしてくださった。聖礼典を定めてくださった。一人で生きていける程に強ければ初めから教会など必要ないのです。

なぜわたしたちに教会があるのか。礼拝をまもるのか。毎週、御言葉に聞き続けるのか。それはわたしたちが一人では立てないからなのです。よく毎週教会に行くことで熱心と思われることがある。キリスト者は毎週の礼拝を重んじます。でもそれは熱心なのではない。弱いからなのです。わたしたちは弱い。だから礼拝を守らなければ、一週間を保つことができないのです。礼拝をまもっても、危なっかしいのです。これが礼拝から離れたらどうなるのか。

礼拝を重んじるのは、そこで御言葉に聞き、聖礼典に与ることで、わたしたちは信仰を保てるからです。「封印」というのは英語では「シール」です。神さまの救いを自分の中に封印してしまう。それは保つためです。ただ注意していただきたいのは、

礼拝の行為、あるいは、聖礼典そのものに救いの効力があるということではありません。その礼拝が、そこで行われる聖礼典が、キリストの救いを現し、そこにわたしたちを与らせるのです。問67を読みます。聖餐の時に、「わたしの記念として行いなさい」とあります。「記念」という言葉は重要な言葉として、アナムネーシス、日本語では「想起」という意味の方が近いでしょう。単なる思い出ではなく、その出来事が立ち上がってくる。追体験です。聖餐に与る度に、わたしたちはキリストの出来事をそこで追体験する。そして、ここにわたしの命がある。そこに救いの土台があることを確かめるのです。

出エジプト記のマナの話を思い出します。人々はエジプトから救われたことを忘れて不平を言います。それほどに神の民は弱い。しかしこの不平、不信を神さまは受け入れられ、マナを与えて彼らを養われました。このマナはまさに救いのしるしとなり、この民の信仰を支えたのです。今も変わらずに、神さまは説教と聖礼典を通して、この礼拝を通して、わたしたちの信仰を守り、養ってくださいます。この恵みを感謝しましょう。祈りをささげます。

天の父。弱いわたしたちのために、教会を与え、また御言葉と聖礼典をもって養い、導いてくださる幸いを感謝します。